

アメリカ小説と批評の研究

巽 孝 之

2017年はアメリカ・インディアンの娘にしてイギリス人に嫁いだポカホンタスの没後四百周年にあたる。その関連が奇遇なのか、今回は、これまで以上に先住民や人種一般の側面からテキストとコンテキストの連動を深く読み込む業績が豊かに実った。

ひとまず個人作家研究から始めよう。

ハーマン・メルヴィル研究における重量級の力作が二冊。

待ちに待った大島由起子の第一著書『メルヴィル文学に潜む先住民——復讐の連鎖か福音か』（彩流社、2017年2月28日）はタイトルどおり、アメリカ文学の正典ハーマン・メルヴィルの全作品にアメリカ・インディアンの影を読み取り、そこに彼の文学の本質を喝破する三部構成、全500頁弱の大冊で、すでに部分的に北米学術誌に発表済みゆえに、その獨創性はあらかじめ国際的に保証されている。先行研究はエリザベス・ライアンズ・バラード（1989年）以降決して少なくはないが、にもかかわらず捕鯨船ピーコッド号の起源たる先住民部族ピーコット族そのものに着目し『白鯨』『イスラエル・ポッター』『クラレル』を「ピーコット三部作」と見なす慧眼は他に類を見ない。じっさい『白鯨』の結末、ピーコッド号沈没の瞬間には、先住民の乗組員タシュテゴがアメリカ合衆国の国鳥トウゾクカモメ（sky-hawk）をみごと狙い打ちするが、そこに大島は先住民の「白人とアメリカ合衆国への報復」を読み込む。加えて、カフカら不条理小説の先駆とも目される「代書人バートルビー」で主人公の用いる動詞“occupy”に注目して土地への不法な居座りと見なし、語り手が彼を強制排除せねばならぬぐだりに民族強制移住の気配を嗅ぎ取り、そしてこれまでバートルビーの前歴として「配達不能郵便物保管課」の意で解釈されて来た“Dead Letter Office”が、じつは先住民から膨大に送りつけられた陳情書を空文にすべく、受取人が読みもせず即反古にして廻す先、すなわちインディアン管理局“Office of Indian Affairs”ではなかったかと噛み砕く咀嚼力は、文学研究でなくては不可能な知的感動を与える。

もう一冊は、大島も敬意を払う五十嵐博によるアメリカ文学研究分野では初となる単著『メルヴィル——“真実の語り手”になった鯨捕り』（国書刊行会、2016年5月15日刊）。『白鯨』を「白人種のキリスト教文明とその偽善に向けて放った弾丸もしくはは鋭利な矢尻」とみなし、初期から後期まで、さらには短篇まで扱う広い射程のうちでは、とりわけ初期作品『マーディ』の中の日本への言及を重視し、そして『レッドバーン』において主人公のうちに『白鯨』の語り手イシュメールを、古参船員でありリーダー格のジャクソンにのちのエイハブ船長の原型を見るという洞察が光る。

アメリカ小説と批評の研究

また昨今ではNHKカルチャーラジオへの専門家の出講が増え、基本的情報と作家作品外観を要領よく整理整頓するばかりか最新の知見をもふんだんに盛り込んだ教科書として伊藤詔子『はじめてのソロー——森に息づくメッセージ』（NHK出版、2017年1月1日刊）と石原剛『マーク・トウェイン——弱さを引き受ける勇氣』（NHK出版、2016年7月1日刊）が出て、広く聴講者を魅了したことも強調しておきたい。

加えて、個人作家ならぬ個人批評家の研究としては、手前味噌ながら評者自身の『盗まれた廃墟——ポール・ド・マンのアメリカ』（彩流社、2016年5月15日刊）が、従来フランス系哲学者ジャック・デリダとの交友からヨーロッパ思想史の文脈で解釈されがちだったイェール脱構築派の領袖ド・マンをアメリカ文学思想史の文脈で再評価した一冊である。とりわけその第三部は、ド・マンと恩師メアリ・マッカーシーとの関係を再確認するとともに、彼女が創始者といわれる大学小説（academic novel）への影響にまで踏み込んだ文学ジャンル論になっている。

文学史的研究では、まずアメリカ・ロマン派文学研究の権威である前掲伊藤詔子のライフワーク『ディズマル・スワンプのアメリカン・ルネッサンス——ポーとダークキャンオン』（音羽書房鶴見書店、2017年3月30日刊）が、ポーを中核にストウ夫人やソロー、フォークナーとの関わりにまで立ち入り、ゴシックから環境批評まで幅広い視角で切り込んだ文学思想史の万華鏡。「ディズマル・スワンプ」はヴァージニア州とノースキャロライナ州にまたがって広がる鬱蒼たる沼地地帯を指すが、この場所性こそはナット・ターナーら黒人奴隷が反乱を起こしたのと同時代のアメリカ・ロマン派の想像力を刺激し「ダーク・キャンオン」をもたらしたのではないかと著者は考える。いわば、ハリー・レヴィンの「闇の力」を生態学的かつ環境批評的パースペクティブから抜本的に更新しようとする野心的著作だ。ほぼ同じ時代を扱い、方法論意識を強調したものとしては、エコクリティシズム研究会のシリーズの一環を成す藤江啓子『資本主義から環境主義へ——アメリカ文学を中心として』（英宝社、2016年8月1日刊）が出ている。

つぎにリアリズム＆ナチュラリズム文学研究の泰斗・大井浩二の『内と外からのアメリカ——共和国の現実と女性作家たち』（英宝社、2016年11月25日刊）が、第一部「新世界を旅する三人のファニーたち」と題してイギリス系女性作家ファニー・ライト、ファニー・トロロブ、ファニー・ケンプルらの見たアメリカを浮き彫りにし、第二部「セネカフォールズ以後の白人女性作家たち」がナサニエル・ホーソーン『緋文字』が主人公ヘスター・プリンを造型するさいに意識していたであろう1848年の女権拡張大会の意義を再評価しつつ、当時から世紀転換期にかけてのアメリカ女性文学を支えたE.D.E.N. サウスワースやアリス・ケアリー、キャロライン・チーズプロからリリー・ブレイク、そしてレベッカ・ハーディング・デイヴィスに至る系譜をみごとに活写してみせる。我が国のアメリカ文学史の欠落部分を補ってあまりある業績であり、とくにイギリスの文豪アントニー・トロロブの母ファニー・トロロブのメリ

回顧と展望

力批判の姿勢から「嫌米する」の意で「トロロプする」(trollpize)なる造語まで生まれていたことは、評者は本書で初めて知った。

続く時代では、里内克巳の第一著書『多文化アメリカの萌芽——19～20世紀転換期文学における人種・性・階級』(彩流社、2017年6月10日刊)が大きな収穫。つい最近の世紀転換期、すなわち20世紀から21世紀への変わり目にカリフォルニア大学バークレー校で在外研修した経験を動機に持つ本書は、ロマンティズムとリアリズム、ロマンスとノヴェルの差異を疑うところから前世紀転換期に勃興した少数派によるテクスト——その範囲はジェイコブ・リースのルボルタージュからW.E.B. デュボイスやフランシス・ハーバー、チャールズ・チェスナットの黒人文学、ジトカラ＝シャやアリス・キャラハンらの先住民文学、エイブラハム・カーハンのユダヤ系文学、スイシンファーのアジア系文学、そして何よりもヘレン・ケラーの聾啞文学にまでおよぶ——を克明に分析し、そこで培われた新しい視点より正典作家スティーヴン・クレインの『街の女マギー』やマーク・トウェインの『それはどっちだったか?』を読み直すという文学史的挑戦として読みごたえ充分だ。

ほぼ同じ時代のモダニズムを中心にしたものでは、フォークナー研究の中堅・諏訪部浩一『アメリカ小説をさがして』(松柏社、2017年3月30日)が当初ぶっきらぼうなタイトルに面食らうものの、第一部における世紀転換期のヘンリー・ジェームズやロスト・ジェネレーションの親分格シャーウッド・アンダソン、ジャズ・エイジの旗手スコット・フィッツジェラルドからポストモダン文学と呼ばれるジョン・アーヴィングやスティーヴ・エリクソンまでの代表作の実直な分析を読み進み、そして第二部に並ぶ——著者が高校時代までプロ棋士養成機関である奨励会に属していたという経歴に根ざす——自伝的文章、とくに最終章に立ち至ると、まさしくこのタイトルしかありえないことが実感されるという仕掛けが面白い。

単著の掉尾を飾るのがポストモダニズム文学研究の大御所・岩元巖の『現代アメリカ文学講義』(彩流社、2016年6月20日刊)となれば、いささか出来すぎているだろうか。けれども、2016年度の収穫にロマンティズム以降ポストモダニズムへ至る堂々たる文学史的研究が出そろったことは、間違いない。本書は著者が翻訳紹介に尽力してきたジョン・アップダイクやケン・キージー、バーナード・マラマッドに始まり、批評家ハロルド・ブルームをも射程に含め、そしてポストモダン・アメリカの前衛小説群アヴァン・ポップにも留意しつつ、リアリズムの伝統が決して失われておらずむしろ再循環することを主張する。里内と岩元のベクトルが交差するところにこそ、現代日本におけるアメリカ文学史研究の可能性がひそむ。

最後に、破格の遺稿集として『田中泰賢選集』全5巻(名古屋:あるむ、2017年3月刊)が出ているのも見逃せない。愛知学院大学教授であった著者はこれまでもゲイリー・スナイダーやアレン・ギンズバークらをめぐる著書や翻訳でも広く知られる

アメリカ小説と批評の研究

ように、ビート世代の文学に造詣が深い。今回その業績が全5巻という選集にまとまったことは、著者を長年貫いて来た仏教というテーマ、とりわけ禅への関心から19世紀から20世紀にいたるアメリカおよび日本文学の作家を論じてきたトランスナショナルな学風の集約として大きな意義をもつ。第一巻「英語・文学・文化の仏教」では、19世紀アメリカの超越主義を中心とした仏教受容の文脈でリディア・マリア・チャイルドの「仏教とローマ・カトリックの類似性」が解説される。第2巻「スティーブンス、ウィリアムズ、レクスロスの仏教」は、20世紀アメリカ詩を牽引した三者の作品を取り上げ、彼らの詩作品を、「無我」や「空」などの禅的観点、あるいは茶道などの日本文化を立脚点としながら考察する。モダニズムの巨匠たちが、いかに、ラフカディオ・ハーンすなわち小泉八雲の文学的世界観を受け継いでいるかを指摘した点も重要だ。第3巻「ギンズバーグとスナイダーの仏教」はギンズバーグと座禅、スナイダーと道元といった観点から出発しつつ、両詩人と宮沢賢治の関係まで敷衍していく。そして第4巻には、博士論文 *Buddhism in Some American Poets: Dickinson, Williams, Stevens and Snyder* (Yushodo, 2008) が再録される一方で、第5巻「禅 Modern Zen Poems of Toshi Tanaka (1916-1996)」では、遺族の作品をも収める。

*

共著の収獲に移る。

まず作家研究では、成田雅彦・西谷拓哉・高尾直知共編の『ホーソーンの文学的遺産——ロマンスと歴史の変貌』(開文社出版、2016年5月30日刊)は、日本ナサニエル・ホーソーン協会が総力を結集した作家の没後150年記念論文集であり、四部構成(「ホーソーンと十九世紀の作家たち」「ホーソーンと二十世紀以降の作家たち」「ホーソーンと子どもたち」「ホーソーンと歴史・人種・環境」)で全19編の力作を収め全470頁におよぶ質量ともみずっしりとした内容は、今後この作家を学ぶ者の絶好の里程標となるだろう。2014年に構想された本書は同年出版になるローレンス・ビュエルの文学史研究『偉大なアメリカ小説の夢』の説く文学的系譜をさらに書き換える卓説を秘める。メルヴィルやジェイムズ、フォークナーとの関連に加え、作家の子息ジュリアン・ホーソーンとの比較までが丹念に検証されて行く展開はまことにスリリングだ。

つぎに、里見繁美・中村善雄・難波江仁美共編の『ヘンリー・ジェイムズ、いま——歿後百年記念論集』(英宝社、2016年8月30日刊)は2011年に立ち上げられたヘンリー・ジェイムズ研究会が同じく総力を結集した400頁強の共著であり、巻頭には主として翻訳を通じたジェイムズ研究の大家・行方昭夫が自身の学風を回顧しつつ精読の意義を再確認する「ジェイムズ学事始」を掲げ、以下の四部構成(「人生と芸術」「揺れる主体」「変わりゆく意識」「非時空間の世界」)のうちに第一線から若手までの力作20編を収めるという陣容。ジェイムズ家の背景から主要小説の大半を網羅しつつ、珍

回顧と展望

しい劇作『ガイ・ドンヴィル』で味わった挫折体験の消息や、未完に終わった小説『象牙の塔』が孕む可能性、アリス・ジェイムズとの関係などもカバーし、方法論は伝記研究から新歴史主義、フェミニズム批評、アダブテーション理論まで多彩。巻末の松浦恵美編「日本におけるヘンリー・ジェイムズ書誌」が本書の意義を一層高めている。

もうひとつ、風呂本惇子・松本昇・鶴殿えりか・森あおい共編『新たなるトニ・モリスン——その小説世界を拓く』（金星堂、2017年3月31日刊）は、まだ専門の研究會や学会こそ結成されてはいないものの、日本人によるモリスン研究の単著がぞくぞくと刊行されている現在、我が国におけるアフリカ系アメリカ文学研究の立役者たちが一念発起してまとめた本格的共同研究。ヴェテランから新進まで多彩な寄稿者が、第一長編『青い目が欲しい』から最新作『神よ、あの子を守りたまえ』、それにモリスンの評論集『白さと想像力』や、彼女がピーター・セラーズ、ロキア・トラオレと共作した戯曲『ズズデモーナ』に至る全作品を扱った全13章構成のうちに、洒落なコラム五編をさしはさむ。そこには謎めいた唯一の短篇「レシタティブ」の徹底解説も含まれる。手法的にもフェミニズムやポストコロニアリズムから環境批評におよび、このアメリカ黒人（女性）初のノーベル文学賞受賞作家を理解する必携書といえる。

*

アメリカ文学史的介入を目指す共同研究も充実している。

まず、アメリ労働集委員会というふれこみの村山淳彦・三石庸子・福土久夫・井川眞砂の共編になる『アメリカ文学と革命』（英宝社、2016年12月5日刊）はジェイムズ・フェニモア・クーパーからポー、ホーソーン、メルヴィル、トウエイン、果てはステイーヴ・エリクソンにおよぶ全12編の力作を集める。本書で云う「革命」は必ずしも独立革命に限らず、エミリ・ディキンソン論でもふれられているように、交通革命や通信革命、果ては南北戦争以後の思想革命にまでおよぶ広範囲で用いられているのが興味深い。ただし、独立革命の同時代におけるコネティカット・ウィッツや共和制感傷小説への目配りもあつたら本書はさらに高次の達成を実現しただろう。

つぎに、安河内英光・田部井孝次共編になる『ホワイトネスとアメリカ文学』（開文社出版、2016年10月5日刊）は福岡アメリカ小説研究会が1960年代を中心にした第一冊、ポストモダンを中心にした第二冊に続いて放つ三冊目の共著。前世紀末より多文化主義が勃興し政治的正しさ（PC）が金科玉条に掲げられるようになった時代にあつて、逆に白人異性愛中産階級こそが最大の少数派扱いされているのではないかという懸念から文化戦争が起り、昨今ではホワイトネス研究に結実した。問題意識は前掲里内の著書とも共通するが、本書はむしろメルヴィルやトウエイン、フィッツジェラルド、ヘミングウェイ、ポールドウィン、モリスンなど文学史的正典を中心にし抜本的な読み直しを図った労作である。

アメリカ小説と批評の研究

そして、広瀬佳司・佐川和茂・伊達雅彦の共編になる『ホロコーストとユーモア精神』（彩流社、2016年9月15日刊）の全12章は、日本におけるユダヤ系アメリカ文学研究の中核を成すメンバーたちの多様な論考から成る。論者同士で作家が重なっている場合もあるが、バシェヴィス・シンガーやバーナード・マラマッド、フィリップ・ロス、シンシア・オジックといった文学的巨匠から、昨今ではノートン社のアメリカ文学アンソロジーにも収められているグラフィック・ノヴェル『マウス』の作家アート・スピーゲルマンまで、そのつない目配りだ。もちろん、さまざまな災厄のあとには歌舞音曲を慎む風潮があるものの、にもかかわらず絶対的悲劇を目撃してしまったら、それに対処するのはユーモア、転じてはブラックユーモアしかありえないというのも、ひとつの文学的想像力の源泉である。とりわけナチス・ドイツによるホロコーストを経験したユダヤ人表現者がいったいどうしてユーモアを発揮出来るのかという謎にひそむその複合的な民族心理をめぐるのは、2016年の日本アメリカ文学会全国大会特別講演者でもあったフロリダ大学名誉教授アンドリュー・ゴードンの寄稿になる『マウス』論が今後の指標になるだろう。

なお、扱われる対象が英語圏に限らない世界文学論集ではあるものの、Leo Loveday and Emilia Parpalá の共編による *Ways of Being in Literary and Cultural Spaces* (Cambridge Scholars Publishing, 2016) には白川恵子が敬虔な聖職者の息子として生まれながら悪漢物語の作家として名を馳せたステイーヴン・バロウズを、藤井光がロード・ナラティヴの伝統を担うホイットマンやケルアックからウィリアム・ヴォルマンに至る作家たちをめぐる、簡潔明快な論考を寄せていることも明記しよう。

*

最後に、2016年度の日本アメリカ文学会第七回新人賞が慶應義塾大学大学院博士課程の Shogo TANOKUCHI (田ノ口正悟) による英語論文 “A Dead Author to Be Resurrected: The Ambiguity of American Democracy in Herman Melville’s *Pierre*” (*The Journal of the American Literature Society of Japan* No. 15 [2016] 掲載) に受賞されたことを付記する。ピエールの創作と宿命の女イザベルの表現とのあいだにアメリカ民主主義の破壊と再創造のナラティヴを読み取る同論考は「既存の研究成果を果敢に踏まえ、独自の論考を展開・貫徹し得た点」が選考委員会より高く評価された。

また、同学会による第一回日本アメリカ文学会賞は鶴殿えりか『トニ・モリスンの小説』（彩流社、2015年9月2日刊）に決まった。選考委員会は「平明な文章」「地に足のついた議論」「今後、我が国におけるモリスン研究にあって必須の基礎文献」などの美点が他の候補を圧倒した結果と報告している。

（慶應義塾大学教授）